

浄

monthly
JŌDO

土

12

December 2005



名号を聞くというとも

信ぜずば、聞かざるが如し。

たとい信ずというとも、

称えずば、信ぜざるが如し。

浄土

2005/12月号 目次

法然上人を語る③	ひろさちや	2
新連載 出雲紀行	森 清鑑	12
会いたい人 小沢昭一さん①	関 容子	18
ライブラリー浄土 お念佛に生されて	梅原真隆	26
表紙のことば	村上 健	33
響流十方	林田康順	34
珈琲のことば 珈琲のじかん	藤原理加	38
仏教コラム	大室了皓	43
浄土誌上句会	選者=増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはねっ	かまちよろろう	47
編集後記		48



表紙題字=浄土門主 中村康隆猥下
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎

子どもが、ある日、七十点取って帰ってきた。「よかったね、よくやったね。それじゃ、今日はあなたの好きなカレーライスをつくってあげましょう」と言って、台所で一生懸命カレーライスを作っている。で、途中で聞くんです。「そういえば、今日の平均点は何点だったの?」。「今日の平均点は八十四点だった」と言えば、その途端にもうカレーライスを作る気がなくなる。

その子が普段は三十点のところ、七十点取った、それはその子の努力で決まることなんです。だから、何だっというわけじゃない。よくやったねと評価してあげるべきなんです。しかし、平均点より上か下かというのは仏様の問題でしょう。仏教の問題です。クラスの中でどれだけできるかは全部仏様が決めてくださることなんです。仏様がくださるものなんだから、平均点以下であろうと上であろうと、どっちでもいいんだ。何だっというと思ってください。

病気になれば、病気がいいんです。健康なるがゆえに浮気して、総理大臣をクビになられた方もおいでになるんだから。そこへいくと、病人はちよつと浮気できないだけ幸せなんです。そういうふうと思う。

私がこういう話をする、と、「先生のような考え方をすると明るくなれますね」と言われる方がいますが、それも大間違いで、明るくなくなっちゃっていいんです。ネクラでどうして悪いんですか。くよくよくよくよ、いらいらいら、がつがつがつ、それもいいんです。何だっというんだから。仏様がくださったものだから。

ときどき、「私は嫉妬深い性格なんです、この自分の性格が嫌なんです」と言われますが、「嫉妬深いというのは個性ですよ」と言うんです。あんな、もっと個性を伸ばしな

いと言いたいですね。

欠点というのは個性です。私は音痴なんです。音痴というのは個性なんですよ。歌がうまくなれば、ありきたりの人間になるんですね。だから、音痴がより音痴になれば個性が伸びたことになるんです。

まず、みんな自分を好きになってください。それは仏様が預けてくださっている私なんだから、それを好きになるのです。私はあっちのほうがいいと、マンションを替えるようなわけにはいきませんから。それは来世にしましょう。あるいは、お浄土に行ってからの問題です。今この世では、この体を預かっているんです。嫉妬深い人は嫉妬深い自分を預かっているんだから、仏様の預かりものとして何だかっていいと考えていたいただきたい。

しかし、私がこういうふうに言いますと、けれども「万が一」のときがあるでしょう。「万が一」のときはどうしたらいいんですか、と聞かれます。「万が一」不幸になったら、どうしたらいいんですか、とよく聞かれるんですが、「万が一」のときには泣けばいいんです。

私たちはみんな、泣いちゃいけないと思うんですね。そして、「泣かないように一生懸命努力しなさい」と言います。しかし、そうじゃないと思うんです。

これはいつも私が使っている話ですが、娘が大学生のときオートバイに乗りたいたったとき、やめろと言おうと思ったんです。オートバイの運転は危ないし、万が一怪我をしたらどうするんだと思って、やめろと言おうと思ったんです。

しかし、よく考えてみたら、自分も大学生のときに親に心配かけてきたのです。それなのに自分が親になったら、子どもから心配かけられるのは嫌だというのは、虫がよすぎる

子どもが、ある日、七十点取って帰ってきた。「よかったね、よくやったね。それじゃ、今日はあなたの好きなカレーライスをつくってあげましょう」と言って、台所で一生懸命カレーライスを作っている。で、途中で聞くんです。「そういえば、今日の平均点は何点だったの?」。「今日の平均点は八十四点だった」と言えば、その途端にもうカレーライスを作る気がなくなる。

その子が普段は三十点のところ seventy 点取った、それはその子の努力で決まることなんです。だから、何だかっていいわけじゃない。よくやったねと評価してあげるべきなんです。しかし、平均点より上か下かというのは仏様の問題でしょう。仏教の問題です。クラスの中でどれだけできるかは全部仏様が決めてくださることなんです。仏様がくださるものなんだから、平均点以下であろうと上であろうと、どっちでもいいんだ。何だかっていいと思ってください。

病気になれば、病気がいいんです。健康なるがゆえに浮気して、総理大臣をクビになつた方もおいでになるんだから。そこへいくと、病人はちよつと浮気できないだけ幸せなんです。そういうふうと思う。

私がこういう話をする、「先生のような考え方をすると明るくなれますね」と言われる方がいますが、それも大間違いで、明るくなくなつていいんです。ネクラでどうして悪いんですか。くよくよくよくよ、いらいらいら、がつがつがつ、それもいいんです。何だかっていいんだから。仏様がくださったものだから。

ときどき、「私は嫉妬深い性格なんです、この自分の性格が嫌なんです」と言われますが、「嫉妬深いというのは個性ですよ」と言うんです。あんた、もっと個性を伸ばしなさい

いと言いたいですね。

欠点というのは個性です。私は音痴なんです。音痴というのは個性なんですよ。歌がうまくなれば、ありきたりの人間になるんですね。だから、音痴がより音痴になれば個性が伸びたことになるんです。

まず、みんな自分を好きになってください。それは仏様が預けてくださっている私なんだから、それを好きになるのです。私はあっちのほうがいいと、マンションを替えるようなわけにはいきませんから。それは来世にしましょう。あるいは、お浄土に行ってからの問題です。今この世では、この体を預かっているんです。嫉妬深い人は嫉妬深い自分を預かっているんだから、仏様の預かりものとして何だかっていいと考えていたいただきたい。

しかし、私がこういうふうに言いますと、けれども「万が一」のときがあるでしょう。「万が一」のときはどうしたらいいんですか、と聞かれます。「万が一」不幸になったら、どうしたらいいんですか、とよく聞かれるんですが、「万が一」のときには泣けばいいんです。

私たちはみんな、泣いちゃいけないと思うんですね。そして、「泣かないように一生懸命努力しなさい」と言います。しかし、そうじゃないと思うんです。

これはいつも私が使っている話ですが、娘が大学生のときオートバイに乗りたいたったとき、やめろと言おうと思ったんです。オートバイの運転は危ないし、万が一怪我をしたらどうするんだと思って、やめろと言おうと思ったんです。

しかし、よく考えてみたら、自分も大学生のときに親に心配かけてきたのです。それなのに自分が親になったら、子どもから心配かけられるのは嫌だというのは、虫がよすぎる

と思いました。それで娘に、「お父さんはあなたが犬怪我でもしないかと心配だ。だが、親があなたにしてあげる仕事というのは、忠告じゃない、アドバイスすることじゃない。親があなたにしてあげられることは、心配することなんだ。その心配という布施をさせてもらおうと思う。だから、あなたは、お父さんが心配しているという荷物をオートバイの横に載せて走ってね」と言ったら、娘は喜んでくれたんです。

ところが、親は子どもに「こうしなさい」とアドバイスする必要があると思われていました。しかし、子どもはみんな仏様の子どもなんです。だから、その子どもは、その子の人生を歩まないといけないんです。

親から見ても危なっかしい人生かもしれなくて、傷つき、のたうちながら生きないといけない。それもまたその子の人生なんです。だから、その子には「やめなさい」と親が言うのはよくないと思います。私はアドバイスはしちゃいけないんだ。その子はその子の人生を生きるんだと思います。

でも、それでその子は傷つくかもしれないけれど、そんなことを恐れていたんじゃないんです。何だっていいんじゃないですか。そして、万が一のときに泣いてやればいいんです。それを、「あのとときああ言ったでしょう。それなのに親の忠告を聞かなかったからこんなことになるのよ」と言います。それは言っただけのことです。万が一のときに一緒に泣いてやるのが本当の慈悲なんです。

これは曹洞宗の禅師の話です。永平寺においでになられたある禅師が若いころ東京で修行をしていたら、お母さんが病気で倒れたということで、福井の実家に帰ってお母さんの看病をしていた。そして、お母さんの病気が治ったもので、また再び修行に出ていく。そ

のときに禅師はお母さんに言った。「私が万が一墮落した坊主になって、世の人々から糾弾されるような破戒坊主になったら、この家の敷居を二度とまたがない。それだけの覚悟を持って修行に出ていきます」と。

そうすると、お母さんが言われたそうです。「お前、馬鹿なことを言うんじゃない。お前が名僧、高僧になったときは、世間が人がちやほやしてくれるんだ。そのときはこんな家なんて帰って来なくてもいいんだよ。こんな家、忘れたっていいんだ。でも、お前が世間の人から後ろ指さされて、みんなが相手にしてくれなくなったら、そのときこそこの家に帰っておいで。玄関から帰ってくるのが恥ずかしいんだったら、裏口から帰っておいで。裏口から入れないようなら、窓を破ってでも入っておいで。お母さんはいつでも待っているからね」と言ってくださった。

この言葉を禅師は忘れることができなかったそうです。したがって、万が一のときに一緒に泣いてあげることが、親が子どもにしてやれる最大の布施なんです。親ができる布施は、子どもをはらはらはら心配して、氣遣うことだけです。

そして、自分の肉体もそうだし、皆さんの女房も仏様からの預かりものだと思ってください。皆さんの亭主も仏様からの預かりものだと思っていただきたいんです。法然上人が教えてくださったのはそのことだと思います。一緒に泣いてやることが布施なんだよということです。

もつひとつ物の差し

私が言いたいことは何かといえは、ダブル・スタンダードなんです。スタンダードとい

うのは標準という意味ですが、物差しと訳しましょうか。そうすると、二つの物差しです。一本の物差しは、日常世間の物差しです。病氣は悪いことなんだという物差し。健康はいいものだということで、健康のためなら死んでもいいというような健康オタクまであらわれる。健康がいいんで、病氣が悪い。若いのがよくて、老人が悪い。いつまでも若く見えるというのがほめ言葉みたいにいる。

何で老けているのが悪いことなのだ。年を取ると、年を取ったのがいいんです。しよばくれたら、しよばくれたのがいいんです。

でも、世間の物差しはそうはいかない。いつまでも元氣はつらつとした老人、「はつらつ老人」がいいと思っています。けれども、そういう世間の物差しだけじゃ駄目なんです。その物差しで私たちは苦しんでいるんです。

それゆえ、私たちにもう一本の物差しが必要です。それがダブル・スタンダード。もう一本物差しを持ちなさいということです。そのもう一本の物差しは浄土宗の物差しで、法然上人から教えられた物差しです。それは何かといえば、計らないということです。

何だっというんだ、お任せします。老けると言われれば老けます。いつまでも若ければ若くていい。がんになれと言われたらがんになればいいんです。がんになれるまで高い年齢まで生きられたというのは、文句言わないでいいんじゃないですか。がんは医者に行っただけで駄目です。がんは治りませんから。医者は悪いもの、がんの部分の切っているだけでしょう。家を壊しているようなものです。

ともかく、もう一本物差しを持つ。そういう仏教を法然上人は私たちに説いてくださったんです。

それでは最後のまとめをします。私がお話ししたのがおわかりになりましたか。私が言ったのは、まずナンだっていい、次にマンが一、そしてダブル・スタンダード。おわかりになりますね。頭をとると「ナン、マン、ダブ」です。もう全部阿弥陀さんにお任せしようじゃないか。浮世の物差しであくせくやって、どうなるというんです。

どうせ、もうすぐみんなお浄土に行くんですよ。だれが、早いか遅いかわかりませんが、あと百年もすれば、ここにいる人は誰も生きていないでしょう。仏様の物差しからみればもうすぐです。あつという間にお浄土に行くんです。したがって、この人生そんなにあくせくしがみつく必要はないんです。何だっていい。苦しいときは苦しめばいいんです。

私がこういうふうに言うのと、「そういうふうを考えることができれば安らかに死ねますね」と言われる方がおいでになる。けれども、「安らかに死ね」なんて法然上人はどこで言っているんですか。のたうち回りながら死んだっていいんです。そこを何だっていいとわかれば、安らかなんです。

こここのところ、ちよっとおもしろいと思うんです。なぜなら、本当に安らかに死にたいんだったら、早くほければいいんです。ほけ老人は安らかです。死の恐怖がないのはほけ老人です。でも、ほけて安らかに死んだほうがいいのか、ほけずに苦しんだほうがいいのか、どっちがいいのかわかりませんね。したがって、のたうち回る羽目になればのたうち回ればいいんです。

みんな地震が来たらどうしようと考えています。もうすぐ関東にも大震災があると思いますが、来れば万が一のときには死ねばいいんじゃないですか。どうせ人間は一度は死ぬに決まっています。早いか遅いかだけです。

しかし、私がこう言ってもダブル・スタンダードだから、行政は浮世の物差しでちゃんと仕事をやってもらわないと困るんです。都議会は東京に関東大震災がもう一辺来たらどうするか、その対策をしっかりと練る。そのために我々は政治家や行政マンを雇っているんです。行政はしっかりと考えるべきで、一方私たちは死ぬときは死ねばいいんです。それがあきらめです。あきらめは「明らめ」です。

この「明」という字はおもしろい字です。どうも日本人は漢字を余り知らないんです。別に私がそんなに知っているわけじゃないんですが、たとえば「正」しいという字は、白川静博士の『字統』を見てびっくりしました。「正」しいという字は、昔は上にある「一」が四角だったんです。この上の四角が変形して一本の棒になってしまったんですが、この四角は何を意味するかといったら、城壁で囲まれた町なんです。

そして「止」という字は本来の意味は「進む」という意味なんです。足跡二つ並べた象形文字。今は反対の意味に使われているんです。だから、「正」という字は軍隊で城壁を攻めるんです。それで勝ったほうが正義でしょう。正義ってそういう意味です。アメリカがイラクを攻めるようなもので、勝ったから正義だと言っているようなものです。正義って怖いんです。恐ろしい。そんな字なんです。

「明」るいという字、これは昔、私は太陽と月だと思っていたんです。そうじゃない。やはり『字統』を見ますと、昔はへんの部分は「囧」という字を書いていた。これが「日」に変わっていくわけなんです。

この「囧」はどういう意味かといったら、窓という意味なんです。だから、窓から月が差し込んでくる。それが「明」るいです。太陽と月じゃありません。よく考えてみると太

陽と月は一緒に出ませんよね。

太陽光線の下で恋人の肌を見てごらんなさい。汚い。やはり、女房が美しく見えるのは窓から差し込んでくる、薄らぼんやりとした窓からの光でもって美しく見えるんです。

ですから、物事をあきらめるといふのは、かつと目を開いて見ることじゃない。これは「察」というんです。目を開いてもものを見るのは「察」なんです。「明も過ぐれば察になり。察になれば疑い多し」と『近思録』という本の中に書いてありました。こまごましたところまで見てしまうと、疑いだらけになってしまいます。

そういえば、仏様の目はみんな半眼になっています。あれは入ってくる光を遮断しているんです。仏様の中でかつと目を開いているのはお不動さんだけです。お不動さんというのは仏の世界でガードマンの役割ですから、警察官として見回っている、そういう役割ですから、かつと目を開く。

しかし、仏様や菩薩様は、みんな目を半分閉じている。それがあきらめです。そういう意味で、私たちは欲望でもってものを見てはいけない。ありのままに見る。何だっていいといったふうに見るのです。それがわかってくると如実知見、ありのままに見られるんです。「南無阿弥陀仏」すなわち「ナン・マン・ダブ」は、何だっていい、万が一、ダブル・スタンダードです。こういう仏教を法然上人は私たちに教えてくださった。これは本当に修行も何もいらぬ、明日からすぐさま幸せになれる、今この瞬間から幸せになれる、そういう仏教なんです。そういう仏教をユーザーの目で、私たちの大衆の目で選択してください。それが法然上人です。この法然上人がお出ましになったからこそ、日本の仏教はこまごまでちゃんと発展することができたんだと、私は信じている次第であります。

(おわり)

出雲

紀行

第一回

森清鑑



出雲大社復元図（日本建築図集相模書房刊より）

機は五月の空に舞い上がった。雄大な富士を眼下に見下ろしアルプスを越え、琵琶湖上空を越えて日本海へと向かった。美しい山並みを過ぎると中海、宍道湖の沿岸をなめ出雲空港に降り立った。

出雲大社

出雲の大社は海の近くにある。高さ二十三メートル、柱の周囲六メートルの大鳥居をくぐり、五百メートル直進すると階段があり上ると再び鳥居。そこから樹齢数百年の古松が両側に立ち並ぶ長い参道を行く。すると銅鳥居がある。右側にひとときわたい松があり「鞍掛の松」という。昔殿様が馬の鞍を太い枝に掛け、お祓いをしたという。その枝も今では手の届かぬ高さに成長している。拝殿の背後に八足門があり、いよいよ本殿である。大社造り。図抜けて大きな社である。高さ二十四メートル。平安時代には倍の四十八メートル

もあつたという。ところが古代には百メートルの社と伝えられている。平安時代のものですら奈良の大仏殿を凌ぐ高さであり、社殿に伝わる百メートルという高さは全く疑問視されていた。ところが二〇〇〇年に拝殿と八足門の間から巨大な支柱が発見された。この発掘は歴史的なもので慎重に進められたが、その結果現れたものは直径約一・二メートルの柱が三本束ねて一本になっているという巨大なもの。これが三、四箇所発見されたがその位置などから専門家による古代本殿の想像図ができあがった。それは正面に急勾配の木の坂道があり、上り詰めると細長い立体の塔のようになっている。そこには伝説の、八雲に届かんばかりの神界に達する古代人の憧れが見て取れる。柱の位置から察するに古代の本殿は拝殿から八足門にかけて存在していたようだ。そして当時はすぐ傍まで海の波が押し寄せていたようである。大社は大国主命を主祭神としているがいずれにせよ古代から稀な

る神域として崇められてきたことは間違いない。

現在の本殿は吉宗公が大改築したもので二百六十年を経ている。国宝である。大社造りの特徴は以下の通り。まず正方形の一辺に三本、計九本の円柱形式、古代の遺産である高床式、御扉（入り口）は正面向かって右に位置、その上に向拝こうはいという屋根がついている。桧皮葺屋根は、千木と三本の勝男木かつおぎ（正面より横に三本）を持つ。交差している千木の両先端部分が垂直に切られている（外削ぎ型）のが男性神、平坦なのが女性神。大社の場合、主神は大国主命であるから前者……などである。注目されるのは内部の御神座が向かって横、西向きに位置していることである。四天王寺の西向き鳥居と同じく夕陽が海に沈む冥界を意味しているのかもしれない。面白いのは本殿の左右に細長く位置する東十九社、西十九社でこれは十月に全国の神が集結するところとされている。すなわち一般に旧暦の十

月は神無月といわれるがそれは全国の神様がここに来てしまうからである。したがって大社では十月を逆に神在月という。

本殿の左側に著名な神楽殿かぐらでんがある。何しろ縁結びの神であるから結婚式が絶え間ない。訪れた日が大安吉日であったので六組が予定されているとのことだった。この神楽殿でなんといいっても驚愕するのはその巨大な注連縄である。長さ十三メー

トル、太さ八メートル、重さ五トンとまさに日本一。

出雲大社はなにしろ桁違いの大きさなのである。古代から人々が出雲大社に寄せる願望は、「雲にも届く大きさ」であった。

◆大注連縄



ルイス・C・ティファニー庭園美術館

出雲大社から国道四三一号線を行くと宍道湖の北側に面してルイス・C・ティファニー庭園美術館はある。どのような美術館であるうかとさしたる期待も無く門をくぐった。すると見事に咲き乱れた白バラの木が出迎えてくれた。左に曲がると「パティオ花の広場」。細長い噴水池を囲むように色とりどりの花が咲き乱れている。息を呑む美しさだ。エントランス・ホールの建築美は簡潔にして洗練されている。展示室に入った。右手に柿右衛門の有田焼、そしてなんと写楽の三世市川高麗蔵。ここから始まった美のショックは例えようも無かった。パリ・サロンではエミール・ガレの家具・調度品に驚嘆した。ルイ・マジヨレルのグランド・ピアノの造形の優美さ、白鳥などのレリーフの大胆さ。上品で濃く、かつちりとしたマホガニーの茶色。ガレのサロンには大きなサイドボード、テーブル、椅子

子が置かれている。どれもこれまで目にした調度品を上回り、一点として隙のない完成された美をとどめている。むしろ息が詰まる思いだ。花瓶、陶磁器、アート・ジュエリー、銀製品。あきらかに日本芸術の影響を受けた作品の数々。

しかし、何といっても感嘆させられるのはルイス・ティファニーの作品群である。ルイス・C・ティファニー。あのニューヨークのティファニー創設者の長男にして偉大な芸術家。ステンド・グラス。これほど美しいステンド・グラスの窓は見たことがない。イタリアに行けば、いたるところの教会に大きな窓があるがいずれも主イエスの物語に関係し、宗教的な心像露出を主眼としている。ティファニーの「鹿の窓」はそのまま一枚の絵になっている。遠くの空を背景に山、白樺の林、中央に川が流れる。長く流れ落ちる河のふもとには赤く咲いた木々の花、そして岩場。そこに一頭の鹿が水を飲んでいいる。水の色は上

流から下流まで千変万化している。白樺の紅葉は繊細な黄色の輝きである。照明は、窓の外の陽の明かりのみ。朝と昼の明るさの変化を受けて、微細に彩られた自然色が絵もいわれぬ光彩を放ちつつ変化する。こうした自然の光景を目の当たりにした錯覚に陥る。

青空と白くたなびく雲を背景にせんになんそ(クレマチス)の紫の可憐な花、つるばら(rambler-rose)のボケのような紅色、小さな緑の葉が織り成す窓辺の風景。きっちり格子状にはめられた窓枠がこの外の光景を鮮やかに映し出す。正に題名「Skylight」のとおり。もうひとつ、再度見てみたいステンド・グラスが「木漏れ日」(Sun-Dappled Woods)である。陽が差し込む森の木々、クワ科の植物アコウの例えようもない美しい色彩の乱舞。このほかにティファニーのステンド・グラスの名作が方々にある。いずれも実際の窓として使われている。

一枚の大きな絵があった。豊かな自然を描

いたものである。最初、油絵だなと思った。ところがさにあらず、水彩画なのである。この絵を見た喜びは望外であった。自分の水彩画手法も在り得ると思った。

ティファニーのジュエリーは、きっちりと調和したデザインのなかに美の凄みがある。嗚呼、彼の作品がティファニー店ジュエリーの原点になっているのだなと感じた。長男として経営を受け継ぐ代わりに、その根幹を成す作品を彼は創造したのである。

ステンド・グラスの数々のランプは、いずれも衝撃的でした。通常は古めかしく、どぎつさを感じる作品が多いものだが、ティファニーのランプには一つのモチーフが貫かれており、その繊細なデザインと多彩な色調の綾は見るものを飽きさせない常新の美的世界を現出させている。いつまでも立ち去りたい作品ばかり。ティファニーの言葉「美への探求は人間の最も健全な行為である」。

アール・ヌーボーを代表する、その幅広い

「美への探究」への結晶は文句無くティファニー作品の世界一のコレクションを形成している。西洋のこうした作品群は合理的な完成美としてはじかれるような思いがするものだが、ティファニーの作品にはとめどない深奥に何かが宿っており、それが今もなお、ある種の新鮮さすら感じさせてくれる。驚愕の思である。

ルネ・ラリック、エミール・ガレ、ドーム兄弟のすばらしい金属装飾品。この中には明らかに日本の美の影響を受けたデザイン・モチーフもある。また、有田、古九谷の模写ではないかと思われる英国マイセンの陶器皿もある。

広重、北斎、歌麿、写楽、柿右衛門に代表される日本の美の文化がアール・ヌーボーの原点であった。そうした事実を現実を超一流の作品を通して見られる稀有な美術館である。フランスの画壇に大きな影響を与えた広重の版画百二十点、北斎漫画の完本十五冊も

収蔵、展示されている。この美術館に並行して英国調の庭園がある。美術館との間仕切りの建物は明るく、広い。そこは大きなガラスの空間の洗練された美の世界である。すでにこの空間から眺望できる花々咲き乱れる洗練された美の庭園と小波寄せる砂浜、それにつながる半島の遠望。この湖畔に面したテラス、熱帯植物園、チャペル。松江市も凄いものを造ったものである。二〇〇一年開館。是非とも再訪し、じっくりと鑑賞したい。

(つづく)

(著者プロフィール)
Mori&Associates代表。
環境・廃棄物調査等。その他海外／国内の広告・マーケティング調査。太極拳講師。



ルイス・C・ティファニー庭園美術館
パンフレットより

◆穴道湖に望む美術館

連載

会いたい人 関 容子



撮影／タカオカ邦彦

小沢さんの一人芝居『唐来参和』^{とうらいさんな}とか芸能座時代の『しみじみ日本乃木大将』とかが好きだし、観た映画では『幕末太陽伝』や『五辨の椿』『青春の門』に独特の味わいがあるし、ラジオの『小沢昭一的ころ』もここ三十何年か続くうちには、笑わされたり心を打たれたりすることが何度もある。著書の『日本の放浪芸』や『ものがたり・芸能と社会』は名著だけれど、『わた史発掘』や『言わぬが花』などの随筆をつい愛読してしまう。俳句を作れば宗匠なみの腕前。これだけ幅広くてしかも総てに突き抜けた存在だと、何から話を切り出したものか迷わされる。

そこで取敢ずこの『会いたい人』にゲストで登場した方々のお名前を順々に挙げていたら、安野光雅画伯のところで小沢さんが、「安野さん……。わたしは安野さんの幻のポスターというのを持ってますよ。ポスターからチラシから大道具小道具、照明から何から全部作って客を入れない、というのをやって

みたかったんです。それで井上ひさしさんの『不忠臣蔵』、雑誌に十二回連載した中の一本をいただいたて、一人芝居に仕立てて、せりふ憶えて稽古もして、熊谷のほうの劇場を借りて、ちゃんと上演したんです。でも誰にも観せなかったの」

ということだが、なかなか事情が呑みこみにくい。

「話はずっと以前に逆のぼります。いつだったか、四谷をブラツと歩いていたら、お岩稲荷の前あたりから何かヘンな声が聞こえるんですよ。行ってみると、亡くなった林家彦六師匠が、あのころはまだ（先代）正蔵でしたけど、一生懸命お稲荷さんに向って一席やっている。何の嘶だかわかんないけど、例の調子ですよ（笑）。師匠とは知り合いの仲だったから、どうしたんです、って声をかけたら、いえね、神様に聞いてもらってる……。って。いいなあと思って、わたしはあんまり神信心はしないんですけど、言わば今日^{こんにち}さまに捧げ

連載

会いたい人 関 容子



小沢昭一さん ①

撮影／タカオカ邦彦

小沢さんの一人芝居『唐来参和』とうらいさんなとか芸能

座時代の『しみじみ日本乃木大将』とかが好きだし、観た映画では『幕末太陽伝』や『五辨の椿』『青春の門』に独特の味わいがあるし、ラジオの『小沢昭一的ころ』もここ三十何年が続くうちには、笑わされたり心を打たれたりすることが何度もある。著書の『日本の放浪芸』や『ものがたり・芸能と社会』は名著だけれど、『わたしたち発掘』や『言わぬが花』などの随筆をつい愛読してしまう。俳句を作れば宗匠なみの腕前。これだけ幅広くてしかも総てに突き抜けた存在だと、何から話を切り出したものか迷わされる。

そこで取敢ずこの『会いたい人』にゲストで登場した方々のお名前を順々に挙げていたら、安野光雅画伯のところまで小沢さんが、

「安野さん……。わたしは安野さんの幻のポスターというのを持っていますよ。ポスターからチラシから大道具小道具、照明から何から全部作って客を入れない、というのをやって

みたかったんです。それで井上ひさしさんの『不忠臣蔵』、雑誌に十二回連載した中の一本をいただいたて、一人芝居に仕立てて、せりふ憶えて稽古もして、熊谷のほうの劇場を借りて、ちゃんと上演したんです。でも誰にも観せなかったの」

ということだが、なかなか事情が呑みこみにくい。

「話はずっと以前に逆のぼります。いつだったか、四谷をブラツと歩いていたら、お岩稲荷の前あたりから何かヘンな声が聞こえるんですよ。行ってみると、亡くなった林家彦六師匠が、あのころはまだ（先代）正蔵でしたけど、一生懸命お稲荷さんに向って一席やっている。何の嘶だかわかんないけど、例の調子ですよ（笑）。師匠とは知り合いの仲だったから、どうしたんです、って声をかけたら、いえね、神様に聞いてもらってる……。って。いいなあと思って、わたしはあんまり神信心はしないんですけど、言わば今日こんにちさまに捧げ

「親父が前の晩にボール紙に金紙貼ったりして、鎧を作ってくれました。器用な人だったんですね。わたしだけが立派な鎧を着て、ほかの子は普通。でも別に両親は見に来たわけじゃないんです。とにかく近ごろは物忘れがひどいんですが、正成のむずかしいせりふは今も言えますね。さても大軍寄せたりな、敵は播磨路須磨の浦、ひよどり越の坂よりも、二つ引き稜四つ目甲斐、輪違いの旗吹きなびかせ、我劣らじと寄せたるありさま……と言うと、して先陣は？　と訊かれる。遠目にしかと見分かねど、赤松筑前とおぼえたり……なんてね」

すごい記憶力。

「いやいや、子供のころだけですよ。昔の自分の出た映画観ても、隅田川へ飛び込むシーンなんかあってもまったく憶えてないんです。え？　こんなことしたっけか、なんて。もつとも美空ひばりさんに会ったときに、ひばりさんの『ラ・浅草』という歌が好きでS

P（レコード）を大事に持ってます、って言ったら、あら、知らないわ、って言うから歌いましたよ、ひばりさんの前で。へ雷門でデートして、仲見世行けば鳩が鳴く……って、雷門を修復したときの記念に隅田川をセーヌに見立ててラ・浅草なんですよ、と言っても、知らないわ、って（笑）。次から次へと追われるように仕事してたころのは印象に残らなかったのかも知れませんか」

小学生のころ、小沢写真館の写場でよく芝居ごっこをして遊んだのが、ご近所の町田裕君で、その犬のジョンとも大の仲よしだった。

「ジョンが好きで可愛がるものだから、町田のこの犬なのにぼくにくつついて歩いてた。あのころは放し飼いだからいつもぼくといたんです。そのうち町田の家が満州（中国東北部）へ行くことになって、ジョンとの別れがつらくてね。引越しの日、トラックの荷台の一番うしろにジョンが乗って、向うが手

え振るわけはないんだけど、ずうっとこっちを見てて消えて行つたのが忘れられません」

後年、町田君とは再会した。小沢さんが早稲田大学と俳優座養成所に掛け持ちで通っていたところだった。

「俳優座で発表会か何かあつて、おふくろが来たんですよ。あれ？　今裕ちゃんいたよ、つて言うんですけど、家族で満州へ行っちゃったんだからいやしないよ、そうかい、つてそれで終つたんです。でも名簿を見てみたら制作部のほうに町田裕つてあつた。すぐに行つて、裕ちゃん、昭ちゃんか、つて抱き合つて喜んだんですけどね。毎日顔合わせてわからなかったのに、おふくろにはわかつたんですよ。町田はあとで日生劇場に引き抜かれて越路吹雪ロングリサイタルなんかを制作した辣腕のプロデューサーになりましたから、二人とも子供時代の遊びが尾を引いて芝居にからんでたわけですね」

小沢さんは麻布中学に入学する。花のザブ中。同級生は堺正俊（フランキー・堺）、加藤武、仲谷昇、大西信行、なだいなだ……といった錚々たるメンバーだった。

「とにかくフランキーは目端のきくやつで、『幕末太陽伝』で主演した居残り佐平次、いのさんそのまんま。たとえば、当時は暖房がなくて寒いから、講堂の地下室で焚火をするんですけど、運動場が崖になつててその下がお寺の墓場。悪ガキ共が降りてつて、塔婆を取つてきてポンポン折つて燃やすわけです。学校側はケシカランというんで、先生方がいっせいに取り囲んで一網打尽につかまつた。そこへ何食わぬ顔で、堺がトントントンと階段を降りてくるんで、堺、何だ、お前もやろうとしたのか。いえ、今ちよつと見ましたら講堂の地下から煙が出ましたので、母校に万が一のことがあつてはいけないと思つて見に来ました。ホラ見る、こういう愛校心のあるのもいるのに貴様らは何だ、つて余計叱ら

れた（笑）。そういう頓智のあるやつで、才気煥発だったから、落語全集から『蚊いくさ』なんていう誰もやらないようなネタを憶えてみごとにやつちやう。のちに文楽師匠から桂文昇という名前までもらっちゃったんですからたいしたものです。そこへいくとわたしなんかは寄席で聴いてきた前座噺を幼稚にやってたくらいのものでしたからね」

昭和二十一年、中学五年（まだ旧制だった）のとき、菊池寛の戯曲『屋上の狂人』を芸能祭で上演する。

「屋根に上ってる兄貴の狂人役が加藤武で、学生力バンを肩から下げてる弟役がわたし。堺はそのころ音楽部のほうに熱心でしたから稽古にもろくに来ないでいて、当日、黒板拭きで頭をポンポンとやって白髪にして、老け役で出たんですが、これがまたうまくてね」
それにしてもすごい配役。観てみたかった。「でも何と言っても女学生にもてたのは仲谷昇ですよ。おとなしくて真面目で、むしろ硬

派でしたけど、あいつが乗る③番の都電（路面電車）は混んでしょうがない。女学生が待ってていっぱい乗ってくるから。ぼくが乗るのはガラガラです（笑）。麻布中学の近くには女学校がたくさんありましたからね、それは花やかなものでしたよ」

その情景を歌った小沢さん作詞によるズンドコ節の替え歌がある。

へ右に聖心左に館（東京女学館）あとに控える順心、英和（東洋英和）粹なザブ中の晴れ姿 麻布が丘は恋の丘

「アハハ、腹はへってましたけど、楽しい時代でした」（つづく）

ライブラリー 浄土

昭和11年6月号

お念ねん佛ぶつに 生いさかれて

梅原眞隆

浄土真宗本願寺派元勸学寮寮頭
元富山大学学長

唯念佛して救はれる——専修念佛——と云ふ事が法然上人の血の出るように御苦勞下された要點であります。そして、念佛一つに我々の完全な生命の救ひを見出された。御念佛を喜ばれた方はそれ以前にも澤山いらせられたが、法然上人に至って、本當にこの御念佛と云ふものの味ひを見出されたのであります。ところが、この専修念佛がや、もすると一つの偏見を伴うてまゐります。

「上人は御念佛一つで助かると仰言つたと云つて、御念佛だけ唱へておれば、法事は要らぬ、學問も要らぬと云ふ態度の人がある。併し、これでは私はどうしても落付けない。法然上人が念佛専修と仰言つたのは他の言葉で云へば、御念佛一つの中に總べてが含まれてゐると云ふ意味に於てゝあつて、總らゆるものを排撃する固執ではなかつた。御念佛は總らゆるものを高次的に統一してゐる。これが

法然上人の御心で、この御心を我々は落付いて考へなくてはいけない。

そこで法然上人の御念佛は、一面から云へば、助業を傍にすると云つて、拜むことも、觀念することも、讀誦することも、供養することも、それを傍にして専念すべしと云ふ處にその有難い御慈悲がある。總らゆる人生生活に排撃したのではなく、念佛の中に全き人生がそのまゝ、念佛で統一されるやうに磨き出された處に、この専修念佛がある。法然上人の御法語に

「衣食住の三つは念佛の助業なり」とあるが、衣食住の中にそのまゝ、専修念佛を仰言つたのは、頑固な偏見ではなく、凡夫の生れつきのまゝ、さながらの人生を靜かに手を合して念佛する處に統制ある價值があるのである。善人は善人ながら念佛し惡人は惡人ながら念佛する。人生を特別な形に規定して、

念佛を固定したのではなくて生れつきのまゝ、念佛するように高次的に統一したのが専修念佛であります。衣食住と限らずとも、人生生活の諸行は悉く念佛であります。

この法然上人の御精神を忘れると、念佛は滅びてしまひます。

さてこの御念佛は法然上人によると往生極樂の途であります。往生の途であると云ふ事は、死んでから先の事のやうであります。そうではなく、滅び行く人生の中に滅びざる人生を掴むと云ふ事である。云ひかへれば永遠の生命を掴むと云ふ事であります。この意味を法然上人は、

「現世の過ぐべき途は念佛の申されんやうに過ぐべし」

と説いてゐられる。往生念佛をはつきり掴まれてゐる、非常に有難い御言葉であります。現世―現實の人生、五十年の娑婆の日暮し、

この生活を私達は如何にして立てるべきであるか、これは古往近來の絶大な謎であります。法然上人は、「念佛の申されんやうに過ぐべし」と、念佛によつてこの謎を解かれた。だから

「念佛の妨げになりぬべくば、何なりともよろづを厭ひ捨て、これを止むべし」

と云はれてゐる。念佛を唱へるに邪魔になるものは、どんな立派な地位であらうが高い生活であらうが、絶體にいけない。眞の人生を見失ふてはならぬ。どんな名譽の仕事でも、眞の人生を忘れてはならぬ。御念佛こそ、この眞人生を掴むものである。だから法然上人は念佛の申されんやうに人生を過せ、御念佛が唱へられなければ、どんな人生でも打毀せと、喝破せられて、嚴肅なる反省を要求せられるのであります。

私は昨年、大阪毎日新聞がサンデー毎日か

に「私の英雄」と云ふ題で選ばされた事がありました。その時に、私は山本進と云ふ名も無い一人の青年を選びました。

彼は現在長崎縣の諫早と云ふ處に、小さな草庵を作つて念佛を唱へてゐますが、東京の大學の英文科出身で、非常に苦學、努力の人であります。始は後藤靜香さんの希望社運動の尖端を行つた人でありましたが色々な事情で最後の彼の魂の落付き場所となつたのは、御念佛でありました。彼が魂の故郷を求めてあちこちを漂泊して最後に留つたのは諫早のある寺であつたが、その老師に依つて御念佛を唱へるやうになりました。道德で人生を生活するものと思つてゐたが、道德では生活出来ないと思つて來た。教壇に立つて倫理の話をしても自分で自分の樂屋がわかつて、何だか嘘を云つてゐるやうで、御念佛を唱へずにはゐられなかつた。始めて自分の魂の故郷

を見出したのです。當時、諫早中學の英語の先生でしたが、洋服のポケットには必ず珠數を入れて、何時も御念佛を餘念なく唱へた。念佛は物の價值意識です。御念佛をしてゐる間に物の價值が解つて來ます。閉ざれてゐた智慧の眼が開かれるのです。彼もこの眼が開かれると、一碗の御飯も、手を合して頂かなければならぬ氣持が起つて來た。今迄は事務的に辯當を開いてゐた先生が、奥さんの作つてくれた冷たい御飯を、手を合さなければ食べられなくなつた。

山本君がかう云ふ氣持になつて來ると、恐ろしいものです。山本君の受持ちの級の生徒達が皆何時の間にやら手を合せて御飯を食べるやうになつた。また、生徒のポケットにも山本君と同じやうに珠數が忍びこんでゐる。所が當時はまだ學校では宗教々育嚴禁の時であつたから、この現象も學校で注意するよう

になつた。また、一面には大學出て間もない青年でありながら生徒から非常に尊ばれた事が、思想上の違つた立場の先生達の妬みとなつて、遂に職員會議の席上で問題となつた。

「山本君のやる事はどうも不可ぬ」

「どこがいかぬのですか」

「君は文部省の訓令を知つてゐるだらうが、宗教と云ふもので子供を育て、はいかぬじやないか。況んや、宗教の形式を以て子供を育て、はいかぬ。君の處の生徒はまるで淨土宗の信者みたいだ。かう云ふことは斷然いけな

い。」

この非難、當時の教育方法から云へば、一應尤もな事です。ところが山本君は

「私は御飯を食べる前に手を合せなさいとは云ひません。珠數を持ちなさいとも教へません。知らず識らずのうちにさうなつたのです。これは決して偽りではありません。だが私は

責任を逃れようとは思ひません。したのではないが、それが結局悪い事ならば、私が悪いのです。私が手を合せて食べた事が、澤山の者を悪くしたと云ふのならそれは私の責任です。けれども、一寸御尋ねしますが、自分で耕しもせずに、坐りながら食べられるのは天の恵みがあるからでせう。それでも私の拜んで食べるのは悪い事でせうか」

と烈々の信念で教員達へ反問した。

「若しも私が拜んで食べられないならば、私はもう教育は出来ない。私の生きる途としてやつてゐる事が間違ひであるならば私は斷然辭職します」

と云つてその場へ辭表を出した。

「イヤ、君はまだ年をとつて居らぬから、そんな事を云ふが、若し辭めてしまつたら明日からどうするかね」と校長が聞くのを

「御親切は有難いが、私は辭めさして貰ひたい。明日からの事等は考へて居りません」

「君は、そんなに逆上せ上つてどうするんだ」

校長の戒めも聞かずに、山本君は遂に辭めてしまった。併し、山本君は一錢の貯へがあるわけではなく、如何にして食ふか、早速に問題となつた。奥さんと相談して、血の出るような思ひをして八百屋になつて諫早の町を歩き始めたのは、それから間もなくの事であつた。心ある町の人は「我々の子供の精神を託した先生であつたのに」

と嘆く者もあつたが、山本君の火の様な信念は次第々々に道を開いて行き、何時の間にもやうな小さな草庵も建ち、靜かに御念佛の出来るやうになつた。

私がこの山本君を「私の英雄」として選んだのは、法然上人の

「念佛の妨げになりぬべくば、何なりともよろづを厭ひ捨て、是を止むべし」

の御言葉に如實に生かしてゐるからであります。先生になつて御念佛が唱へられなければ、八百屋になつて念佛を唱へる。八百屋になつて念佛を唱へられなければ乞食になつて唱へる。御念佛は我々の生活の指標であり、迷を開き悟を開くものである。

「若し聖で申されずば、妻を儲けて申すべし。妻を儲けて申されずば、聖で申すべし。住所にて申されずば、流行して申すべし。流行して申されずば、家に居て申すべし。自力の衣食にて申されずば、他人に助けられて申すべし、他人に助けられて申されずば、自力の衣食にて申すべし。一人して申されずば、同朋と共に申すべし。共行して申されずば、一人籠居して申すべし。」
法然上人の御信念は實にはつきりしてゐるま

古き伝統技

三代にわたる信頼

浄土宗法衣専門

有限会社

古島法衣店

〒111 東京都台東区元浅草4の2の1

電話(03)3842-1289

振替001800245231

す。ともかく我々の生活の全部が御念佛を唱へられるやうに役立たなければならぬ。そこにほんとの人生の価値があるのです、御念佛を喜んで、一足々々西方の御浄土に向つて行く。これが我々の本當に救はれる道であります。

とにかく、法然上人は御念佛一つを人生統

一の指導原理として受敬せられ、どんな立場や生活をしてゐても、御念佛を唱へて救はれるやうに人生を組立てよと御親切にお諭しになつたのです。このお諭しは如何に時世が變らうとも、永遠に我々人類に不滅の意義を與へるものであります。

2005

12

静かなまちの街

絵と文

村上健

空襲を免れた古都金沢は、名所旧跡はもちろん、私の好きなレトロな商店が数多く残る街です。兼六園に近い、静かな一画にあったハンコ屋さんもそんな一つでした。

ところでハンコには実にいろんな種類と材質があります。認印、実印、社印、割印。本柘殖、水晶、水牛や羊の角、象牙、果てはまっこうくじらまで。商売や本人特定に欠かせないハンコですが、昨今ネットバンキングや生体認証など、ハイテク商売やシステムが流行りはじめ、数千年の長寿商品ハンコの命運も尽きるのでは……。と思ったら、二十万円近い吉相印なんてのもあって、この手が好きなお方も依然少なくないはず。それに、吉相パスワードや吉相指紋認証などはまだない。よって、この店の静かなたたずまいは、当分保たれることでしょう。

釈尊在世の時すら、即身成仏におきては、龍女のほかいとありがたい。
たし。

（『念仏大意』）

お釈迦さまがいらっしゃった時代ですら、この身このままで仏となったのは、『法華経』に説かれる龍女以外にはいようはずもありません。

五十六億七千万年も待たずとも…

「みなさん、皇円阿闍梨がわが身を龍にかえてまで、今も待ち続けておられる弥勒菩薩は、いったいいつ頃この世にお出ましいただけると思われますか？そちらのご主人いかがですか？」

「え、私ですか？そうですね。千年ぐらい先のことですか？」

「なるほど千年ですか。どうもありがとうございます。みなさんはどれ位の時間を想像されましたか？実は、弥勒菩薩が仏となってこの世にお出ましいただくのは、なんと五十六億七千万年も先のことなんです。」

「えー（驚）」

このやりとりは、去る十一月十三日、静岡教区教化団・檀信徒会共催になる「お念仏と法話の集い」での一齣です。その日の会場は、菊川市の応声教院でした。応声教院は、斉衡二（八五五）年、文徳天皇の勅願所として慈覚大師円仁により創建され、行基菩薩作と伝えられる阿弥陀如来座像や少しだけ口を開いて歯をのぞかせている歯吹如来（阿弥陀如来立像）など、多くの宝物が伝来している名刹です。

その応声教院とそこからほど近い桜ヶ池（御前崎市）には次のような伝説が伝えられています。比叡山功德院に住み、その弟子三千人と謳われた皇円阿闍梨は、衆生済度のため、弥勒菩薩が仏となってこの世に出現される時を待ち、直接その教えを受けて成仏を遂げようとの大願をお建てになりました。そして、

嘉応元（一一六九）年、皇円阿闍梨は、その願を成就するため、わが身を龍にかえて桜ヶ池に入定されたのです。皇円阿闍梨が桜ヶ池に足を運ばれた際に宿とされたのが応声教院です。

周知のように皇円阿闍梨は、比叡山で修学されていた法然上人が『法華玄義』『法華文句』『摩訶止観』という天台三大部を学ばれた際のお師匠様で、神武天皇から堀河天皇までの仏教中心の歴史書『扶桑略記』全三十巻の撰者としても著名な高僧です。

皇円阿闍梨入定の後、浄土宗を開宗された法然上人は、恩師を慕って桜ヶ池を訪れ、桧造りのお櫃に赤飯を詰めて供養のため池中に沈めました。毎年、秋彼岸のお中日、桜ヶ池の池宮神社では、法然上人に倣って、皇円阿闍梨供養のため、青年氏子十数名が四升五合の赤飯を詰めたお櫃を立ち泳ぎで池の中央に運び、順次これを沈めて龍に供える納櫃祭を勤めており、この行事は県の無形民俗文化財に指定されています。

桜ヶ池から帰洛の途中、応声教院に立ち寄られた法然上人は、皇円阿闍梨の形見として龍の鱗を奉納され、七日七夜の別時念仏をお勤めになりました。今も、法然上人が納められたという三枚半の龍の鱗や別時念仏の際に鳴らされたという鉦鼓が大切に保存されています。以上が、応声教院と桜ヶ池に伝わる伝説の概要です。

さて、こうした伝説からは、法然上人ご在世当時、日本各地で弥勒信仰が広まっていたことが分かります。法然上人も、その主著『選択集』の中で阿弥陀さまの極楽浄土への往生と弥勒菩薩がおられる兜率天への上生との優劣を論じておられます。そして同時に、冒頭の法然上人のご法語にあるように、この娑婆世界でどれほど学行を修めようとも、この身このままで仏となることなど万分の一も叶うはずがない現実のありのままの姿を、この伝説は見事に明らかにしてくれます。そうしたありさまをご承知の上で法然上人は、お念仏さえ称えれば、阿弥陀さまのお力に乗じてお浄土に往生して俱会一処が叶えられる、そして、だからこそ、そのお浄土で心おきなく仏道に邁進し、すべての者が仏になれるのだ、と身命を賭して説き続けられたのです。

応声教院での法話の最後に私はこう申し上げました。「よろしいですか、皆さん。私たちは、皇円阿闍梨のように龍に身をかえて五十六億七千万年も待たずとも、必ず誰もが浄土往生を叶えることができ、そこで直接阿弥陀さまのお話を聞いて、速やかに仏になれるのですよ。実にありがたいことです。そのためのたった一つのお約束こそ、お念仏に他ならないのですよ」と。合掌

(大正大学専任講師・林田康順)

珈琲のことば

その二

〔続・豆〕

〔悲劇のブルーマウンテン〕

じかん

ある冬の黄昏時。いつものカフェDのカウンターにて、マスターから、「なぜ珈琲豆には山の名前のものが多いのか？」のワケを教えてくださいました。かいつまんでいえば、「良い珈琲豆の条件とされる酸味と香り、それは一般的には標高の高い場所で採れた豆ほど備えているといわれているから」。つまり、山の名前がついているというのは、それだけです。すでに「この豆はたいへん上質ですよー」という高品質サインなのだそうです。さらに、高品質サインといえば、「グアテマラSHB」の「SHB」とか、「モカ・マタリ」の「マタリ」や「ブラジル・サントス」の「サントス」も同じ。

「SHB」は「グアテマラの中でも最も標高の高い畑で採れたものなんですよ」という標高高いサインで、「マタリ」や「サントス」は港の名前サイン。つまり、「これはモカやブラジルの中でも、マタリ港やサントス港から出荷された由緒正しき豆ですよー」という意味なのだとか。なるほどねえ……また一つ賢くなりました。

さて、そんな最高級豆の中でも、世界一高価とされるのが、かのブルーマウンテン。その名の通り、カリブ海はジャマイカの名峰ブルーマウンテンで採れたこの豆の端正な味わいをカフェDのマスタ―は「珈琲の吟醸酒」とも評します。

藤原理加



「でもね、この豆は一方で、悲劇の豆でもあるんですよ。ブランド価値が高いだけに、まがい物の流通も非常に多い。多くの人に本当の美味しさを知られていない、すごく誤解の多い豆。そういう意味で、ほんとに悲劇の豆なんですよね」

たしかにそうでした。カフェDのブルマンは、これまで私がブルマンに持っていた「やや酸味が強いかなぐらいで、とりたててスゴイというほどの味はない」というイメージとはまったく違います。口に含むとすーっと爽やかで、嫌な雑味が一切ない。でも味がないわけではなく、ちゃんと豊かで。日本酒でいえばまさに五味のバランスがとれた端正な吟醸酒です。これなら高価なものも納得だし、その

素敵な軽やかさは、こんな夕食前のひと時には、本当に良く合います。お気に入り豆を見つけてそれを飲み続けるのも一つの道ですが、TPOに合わせて珈琲の豆をいろいろ変えてみるのも楽しいものだと、この日、改めて実感しました。

「じゃあ次は、ブルマンとはまた全然違う、個性派の、エッジの効いた酸味が魅力のキリマンジャロを試してみますか？ この豆も誤解の多い豆ですし……」。キリマンジャロの誤解。ああ、なんとワクワクするフリーズでしょう！ というわけで、今回は、カリブ・ジャマイカからアフリカ・タンザニアへ。珈琲を知ると、なんだか世界地図も開いてみたくなります。



800号記念特集

通巻800号という長い歴史は、多くの先達の支えがあって作られてきている。ここでは800号発行を目前にし、「浄土」誌面を飾った人たちのお名前を列記させていただく。誌面の都合上、全員のお名前は掲載できないが、表紙を書いて下さった何人もの画家、教化の一助となる一文を寄せていただいた諸大徳、また宗教誌にもかかわらず原稿をお寄せいただいた文化人の方々など、安い原稿料、あるいは現物支給という方も少なくないのにも関わらずご協力いただいた方々に、改めて誌面より心よりの御礼を申し上げさせていただきます。今月は創刊から戦前までといたします。

浄土誌面を飾った人々

【戦前編】

(昭和10年5月、20年3月)

眞野正順	大島徹水	鈴木天山	吉水辨堂	中村康隆	佐藤密雄
椎尾辨匡	中野善英	野上運外	富士川游	山田昇禪	鈴木浄海
岡本かの子	與謝野晶子	井川定慶	諸岡存	吉原自覺	細井照道
佐藤春夫	山岡莊八	石井教道	中野尅子	渡辺海旭	藤井亮傳
中村辨康	井上正春	笹本戒淨	首藤莞爾	高嶋米峰	望月信成
白鳥省吾	江藤澈英	菊池謙雄	一龍齋貞鏡	石井眞峯	福田有識
相馬御風	岡本綺堂	藤井實應	里見達雄	友松圓諦	齋藤清
曾我屋五郎	中村吉右衛門	岩井智海	白旗靈光	中野隆雄	安居大學
佐藤賢順	安藤不二夫	井口乘海	福田闌正	金田明進	北條春光
矢吹慶輝	大村桂巖	服部宇之吉	惠谷隆戒	福田有戒	後藤眞雄
岩野喜久代	窪川旭丈	本多静六	子母澤寛	安田秀賢	八百谷順應
谷孫六	青柳喜兵衛	安藤正純	大橋りゆう子	長谷川良信	濱野義光
佐藤良智	服部賢成	山田巖雄	樹下行雄	三木武夫	小川全英
望月信亨	倉田百三	戸松學瑛	佐山學順	野島宣道	尾上菊五郎
高村光太郎	山中峯太郎	松本幸四郎	池田英淳	鳩山一郎	岡本一平
大野法道	瓜生天全	谷中安規	一龍齋貞丈	鶴飼隆元	川村良孝
中里介山	小池重	吉田絃二郎	武者小路実篤	増谷文雄	村瀬秀雄
梅原眞隆	赤尾光雄	鶴見祐輔	郡島誠也	高瀬承嚴	成田有恒

浄土
通巻800号
記念

講演会／展示会
のお知らせ

【講演会】

平和のために
仏教とキリスト教
の対話

法然上人の教えとともに
日本カトリック東京大司教

岡田武夫

浄土宗 大本山増上寺法主

対談

成田有恒

おかだ・たけお／1941年10月24日千葉県市原市生まれ。73年司祭に叙階され、91年には埼玉教区司教任命、2000年に東京大司教に任命される

なりた・ゆうこう／大正10年（1921）10月6日東京都世田谷区生まれ。昭和9年浄土宗僧侶となり、以後浄土宗要職歴任、平成3年に浄土宗宗務総長、13年に増上寺第87世法主に。昭和35年第44回直木賞受賞。著書多数。

【展示会】

『浄土』表紙展

創刊号から
800号まで

日時

平成18年1月31日（火曜日）
午後1時より午後3時まで

場所

東京プリンスホテル
マグノリアホール

入場料

無料

昭和9年、浄土宗の有志で発足した法然上人鑽仰会は翌年の昭和10年5月に一冊の月刊誌を創刊。その名は『浄土』。戦時中にはやむなく休刊するも、昭和21年3月には復刊、平成18年2月には通巻800号を発行。

日時

平成18年1月31日（火曜日）
午後4時より午後5時30分

場所

東京プリンスホテル
マグノリアホール

（東京都港区芝公園3-3-1 都営地下鉄御成門駅下車徒歩3分）

参加費

法然上人鑽仰会会員 無料
（後日、招待券をお送り致します）

一般

1000円

（12月1日～びあチケット取り扱い中 Pコード 606-019）

問合せ先

法然上人鑽仰会

TEL03-3578-6947

（月～金 10時から16時まで）

大室了皓 ◆ コラム サンタクロース(見えないもの)

百年以上も前のアメリカでの有名な話を知りました。(東京新聞)

バージニアの八歳になる少女が、地元のニューヨーク・サン紙に「サンタクロースって本当にいるんでしょうか」と投稿しました。

返事は社説に載りました。

「この世の中に、愛や、人への思いやりや、真心があるのと同じ様に、サンタクロースも確かにいるのです。この世でいちばん確かなこと、それは子供の目にも、大人の目にも見えないものなのですから」

夢と愛情をもらった少女は、長じて先生となり、長期入院の子供のための学校で副校長も勤めました。

「見えないもの」を大切にする先生になったのだらうと思います。

最近、非情にして残忍な出来事が次々

と起きています。

あるモーター会社の社長宅に二人が忍び込み、社長夫人と長女の二人を殺害して貴重品を盗んだうえに、その家に放火した事件が三年ほど前に起こりました。懸命の捜査のおかげで漸くその犯人が先ごろつかまりました。

その家は証拠物件として今も縄がはってあり、自分の家でありながら、社長さん自身でさえ立ち入りが出来ない状態だと聞いています。

最愛の家族を失い、家をも焼かれた社長さんの悲しみは、言語を絶するものだったでしょう。そのご本人が語っておられました。

「目には見えないけれども、霊はあるのだと最近になって悟りました、それから漸く心が落ち着くようになりました」と。



浄土誌上句会

●村

〔特選〕秋祭り村ふくれくる踊りの輪

山口 信子

村のどこかに広場でもあるのだろうか。輪を作って踊りが始まる頃には、取り囲む輪もどンドンふくらんでくる。村人だけでなく、近郷からもやってくるのだらう。こうして秋祭りは最高潮に達する。

〔佳作〕秋海棠咲かせて村の集会所

金谷 友江

村衆の竹を伐る音響きこ合う

井村 善也

村外れ地蔵とり巻く曼珠沙華

石原 新

●穴

〔特選〕穴子より鰻が好きと生き仏

佐藤 雅子

回りから仏のような人として尊敬を集めているのである。それほどの人穴子より鰻が好きだという。誰が何を好んでも不思議では

ないが、このように表現されると何となくおかしくなる。俳諧である。

〔佳作〕 若者の膝の風穴秋高し

中島富士子

足元へ穴子這い出す糶々中

浜口 佳春

石舞台穴の中より汗の顔

増田 信子

●自由題

〔特選〕 造林の杉の剣先月明し

一丁田美恵

杉山を月が明るく照らしている。植林だから等間隔に行儀よく、しかも同じような高さで立っているのである。幾千という杉が月夜に剣先をそろえている様子は、莊重というにふさわしいものだろう。

〔佳作〕 秋の陽を受けて背中也尻も象

大森 栞

この路地にいろいろ死んで良夜かな

内藤 隼人

籠りいて地図の上なる秋の旅

小林 恵美



編集部選

参加作品

村

村はじめ木犀の香の流れ来て

伊藤寿美子

村祭り綿菓子買う子顔見え

谷 しげ子

無造作に萩が活けらる村役場

浜口 佳春

霧生まる大小の村明日香かな

増田 信子

神無月村は祭の笛太鼓

中島 一子

道の辺に野菊溢れて過疎の村

中島富士子

柿赤しこの樹もて村境とす

片桐てい女

秋祭小さき村の村おこし

大場 清

杉木立抜けて野菊の村となり

河合富美枝

秋灯や村の語部老いしめす

周東 澄江

村が町に町が市になる祭詣

山本美代子

良夜かな村に増えたる猫の数

佐藤 雅子

穴

穴深く掘って囲えり独活の太

金谷 友江

小春日の蟹が穴掘る潮だまり

河合富美枝

父のセルの虫食穴も懐かしや

周東 澄江

ボタン穴ひとつたがえてそぞろ寒

山本美代子

畦道の所どころにもぐら穴

中島 一子

休暇果つ大樹にあまた蟬の穴

片桐てい女

風穴に一葉落ちゆく樹海かな

大場 清

自由題

銀杏を拾う身支度ものものし

中島 一子

暮の秋ひらひら皿を沈ませて

中島富士子

破れ傘枯れて開閉ままならず

片桐てい女

松茸の喜捨承く僧の現顔

佐藤 雅子

秋寂や気丈に生きるほかはなし

金谷 友江

心経の一語違へず露の秋

河合富美枝

父の忌の供華とす庭の式部の実

周東 澄江

鐘ひとつみかんひとつで年送る

山本美代子

コスモスの揺れて干し物乾きけり

西井 正

月昇る海峡の灯を従えて

寺下 忠至

嵐あと風に修羅なす萩の花

蘭田 郁子

浄土誌上句会のお知らせ

題

⑤季語ではありません

袋 自由題

締切・二〇〇五年十二月二十日

発表・『浄土』二〇〇六年二、三月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

●葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

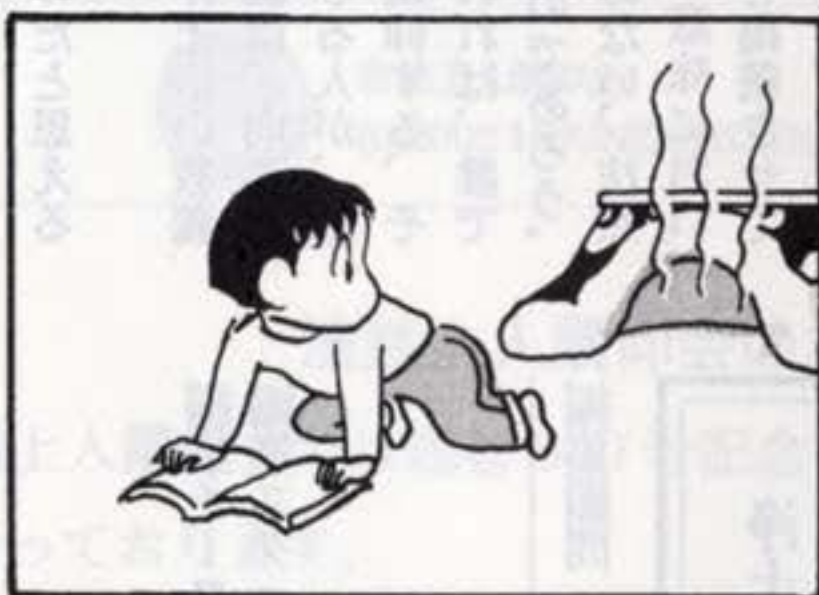
宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

さっちゃんね

26 かい目

かまちおふう



編集後記

丸まった猫のまわりの落ち葉掃く 岱潤

通巻八〇〇号も間近に迫ってきた。
『浄土』誌上でもこのところ、ライブラリーと称して過去の名文を掲載している。今月号でも梅原真隆師の昭和十一年六月号の文章を掲載させて頂いた。ご存じのとおり梅原氏は浄土真宗本願寺派の僧侶である。編集会議の時各氏から、やはり浄土宗内の人の方がという意見が多く出た。しかし私が過去の『浄土』誌をめぐって書いて気がついたのは、戦前の創世期のころは、実に他宗の方の執筆が多いのである。特に浄土真宗の先生の執筆が多い。これはやはり、この会を立ち上げた先生の心には、宗派の枠を超えた法

然上人鑽仰の気持があつたのだと思えるのである。

今の浄土真宗の教義と、浄土宗の教義が合わないなどと言った議論は、向こうに置いておいて、念仏を信じる人が、念仏の祖師として法然上人を鑽仰する、その心を文章にしたためてくれれば、誰でも、どの宗派でも良かったのであろう。そうした宗派の枠に閉じこめない、法然上人鑽仰の心を広く伝える意味において、敢えて梅原先生の文章を掲載させて頂いた。しかし、この事にこだわるのは、僧侶の方ばかりで、一般の読者にとつてはとまどうばかりであらう。

(長)

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々
飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
江口定信(浦安・大蓮寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
大田秀三(大本山清浄華院)
北山大超(焼津・光心寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
袖山榮眞(長野・十念寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村眞道(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
樋口隆信(石巻・西光寺)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓爾(静岡・華陽院)
真野龍海(芝・天光院)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山光明寺)
宮林雄彦(横浜・大光院)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://gekkan-jodo.info>

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

佐山哲郎

青木照憲

村田洋一

編集顧問

大室了皓

浄土

七十一巻十二月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成十七年十一月二十日

発行 平成十七年十二月一日

発行人

真野龍海

編集人

佐藤良純

印刷所

株式会社 シーティリー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七・四 明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三五七八)六九四七

FAX 〇三(三五七八)七〇三六

振替 〇〇一八〇・八・八二八七

月刊 浄土 もうすぐ 800号

法然上人鑽仰会

HOUNENSYOUNIN SANGOUKAI

法然上人鑽仰会

月刊「浄土」

浄土の広場

月刊「浄土」検索

| お知らせ | 会員募集 | サイトマップ | メール |



法然上人鑽仰会

(C)2002 HOUNENSYOUNIN SANGOUKAI. All rights reserved.

法然上人鑽仰会のホームページご紹介

法然上人鑽仰会では通巻 800 号記念事業の一環としてホームページの整備を行っております。

ホームページでは今までに刊行された浄土の目次検索や一部本文の検索などができますし、内容も一部提供してインターネット上でお読みになることができます。

また浄土の広場では、インターネット上から俳句の投稿などもできます。

どうぞご覧ください。

<http://honen.sangou.net>

<http://gekkan-jodo.info>

法然上人鑽仰会の

本



『念佛讀本』完全復刻版
1,600円

※額装寸法47×59cm



委託販売

増補版『浄土への道
法然上人法語抄』
1,000円



『差出人は法然さん』
600円

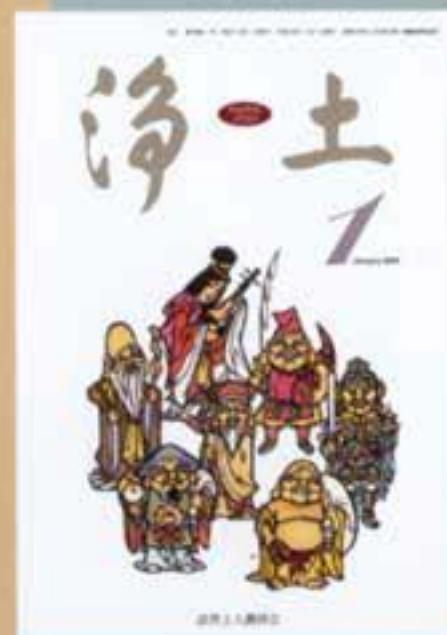
選擇集十六章之図(額入り)
『選擇集絵解き物語』含む
20,000円 (別途梱抱料300円)



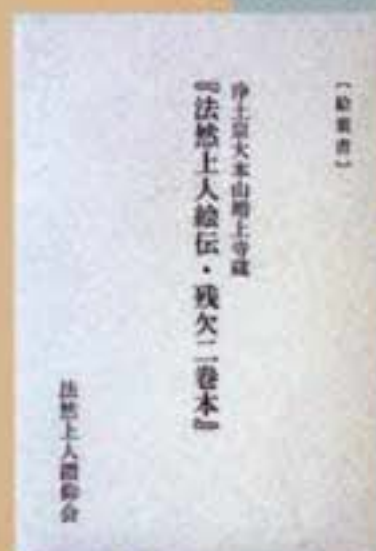
『ブッダ
知れば知るほど』
1,000円



月刊『浄土』
バックナンバー



『法然上人絵伝絵葉書』
(8枚セット)800円



※浄土宗大本山増上寺蔵
『法然上人絵伝・残欠二巻本』より

当会発行の書籍、雑誌のお求めは、
当会へお申し込みください。なお、月
刊『浄土』を除き価格に送料は含まれ
ておりません。別途実費を申し受けます。

法然上人鑽仰会
電話 / 03-3578-6947
FAX / 03-3578-7036